The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Maternal Postpartum Depressive Symptoms Predict Delay in Non-verbal Communication in 14-month-old Infants
Author(s)	河合, 恵美子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　河合　恵美子　）	
論文題名	Maternal Postpartum Depressive Symptoms Predict Delay in Non-verbal Communication in 14-month-old Infants （母親の産後うつ症状は14か月児における非言語的コミュニケーションの遅延を予測する）

論文内容の要旨

〔　目　　的　〕

乳幼児のコミュニケーションスキルは一般に、音声言語の表出や理解から構成される言語的コミュニケーションスキルと、身振りや模倣などから構成される非言語的コミュニケーションスキルに大別される。

乳幼児の言語的コミュニケーションスキルの発達は、児の母親が産後うつ症状を呈すると遅延する。しかし、乳幼児の非言語的コミュニケーションスキルの発達が、児の母親の産後うつ症状によって遅延するかどうかについては分かっていない。本研究は、14か月児の非言語的コミュニケーションスキルと児の母親の産後うつ症状との関連を疫学的に解明することを目的とした。

〔　方法ならびに成績　〕

浜松母と子の出生コホート（HBC Study）に参加する951名の14か月児を対象とした。目的変数としての非言語的コミュニケーションスキルの評定には、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙を用い、2つの下位得点（早期・後期身振り得点）を算出してZスコア化した。母親の産後うつ症状は、HBC Studyにおける児の出生後1か月・10週のエジンバラ産後うつ質問票（EPDS）の得点を利用して評価した。先行研究に従い、うつ症状の重症度を3段階（0～8点＝低水準、9～12点＝中等水準、13～30点＝高水準）に分類した。非言語的コミュニケーションスキルと母親の産後うつ症状との関連を説明・交絡しうる因子として、児の性別・同胞順位、母親の年齢・教育歴・うつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状の有無、母乳哺育の有無を測定した。

解析においては線形回帰モデル解析を採用し、早期身振り得点・後期身振り得点を目的変数、出生後1か月・10週のEPDS得点（3段階化）を独立変数とし、児の性別・同胞順位、母親の年齢・教育歴・うつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状の有無、母乳哺育の有無を共変量として一定の手順で投入して結果を得た。

母親が出産後1か月または10週後に高水準のうつ症状（EPDS得点：13～30点）を呈すると、14か月における対象児の早期身振り得点が約0.5標準偏差分低くなり、後期身振り得点も約0.5～0.7標準偏差分低くなった。これらの関連は、母親のうつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状、母乳哺育などによっても交絡されていなかった。

〔　総　　括　〕

母親の高水準の産後うつ症状は、乳幼児期の非言語的コミュニケーション発達遅延の、独立した危険因子である。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　河合　恵美子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主　査　　教　授	谷　池　　雅　子
	副　査　　教　授	松　﨑　　秀　夫
	副　査　　教　授	髙　貝　　就

論文審査の結果の要旨

乳幼児の言語的コミュニケーションスキルの発達は、児の母親が産後うつ症状を呈すると遅延することが報告されているが、乳幼児の非言語的コミュニケーションスキルの発達が、児の母親の産後うつ症状によって遅延するかどうかについては分かっていない。本研究は、浜松母と子の出生コホート（HBC Study）に参加する951名の母子ペアを対象とし、14か月児の非言語的コミュニケーションスキルと児の母親の産後うつ症状との関連を疫学的に解明することを目的として行われた。

目的変数としての非言語的コミュニケーションスキルの評定には、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙を用い、2つの下位得点（早期・後期身振り得点）を算出してZスコア化した。母親の産後うつ症状は、HBC Studyにおける児の出生後1か月、10週のエジンバラ産後うつ質問票（EPDS）の得点を利用して評価した。うつ症状の重症度は先行研究に従って3段階（0～8点＝低水準、9～12点＝中等水準、13～30点＝高水準）に分類した。非言語的コミュニケーションスキルと母親の産後うつ症状との関連を説明・交絡しうる因子として、児の性別・同胞順位、母親の年齢・教育歴・うつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状の有無、母乳哺育の有無を測定した。

解析においては線形回帰モデル解析を採用し、早期身振り得点・後期身振り得点を目的変数、出生後1か月・10週のEPDS得点（3段階化）を独立変数とし、児の性別・同胞順位、母親の年齢・教育歴・うつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状の有無、母乳哺育の有無を共変量として一定の手順で投入した。

以下の結果が得られた：母親が出産後1か月または10週後に高水準のうつ症状（EPDS得点：13～30点）を呈すると、14か月における対象児の早期身振り得点が約0.5標準偏差分低くなり、後期身振り得点も約0.5～0.7標準偏差分低くなった。これらの関連は、母親のうつ病既往歴、出産後に遷延するうつ症状、母乳哺育などによっても交絡されていなかった。

この研究は、母親の高水準の産後うつ症状は、乳幼児期の非言語的コミュニケーション発達遅延の独立した危険因子であることを明確に示し、産後うつ症状の発見と適切な対処についての警鐘を鳴らした重要な研究である。研究の目的も当研究科の理念に沿っており、博士（小児発達学）の学位授与に値する。